橘曙覧遺稿
志濃夫廼舎歌集

一

土岐文庫
文庫17
W48
1

志濃夫廼舎翁小像

橘曙覧遺稿

志濃夫廼舎歌集

井手氏蔵梓

文庫 17 W48 1

昭和六十年二月一日、土岐善麿氏寄贈

010185194600

志濃夫迺舍翁小像

橘曙覧乃家にいたる詞

おのれにまさりて物しれる人は高きも賤きも

撰はす我師とあふきてまなひよるこゝろあれは

語をさへおもしろくきゝはへりて

弥生の九日朝あけはのに思たちて

あれは足羽山のふもとに

己のすみかより橘のもとに

ふかくしける中に曙覧の家なれと

雲ゐして不通峯乃居の廿二

神去迺丹寓乙吐く升琴

曙覧

いく数年て依小とゝ霧とおりいまりゆかなし
さる紀板花乃浅ましきまてかくいのみしかんるかれ路
すかたうしけれはいかゝ物なふやむまかゝゆさをせり
紫の門もるておか不都合なきかしらのかんかはい好み師傅良人
を紀藤原しく多くの漢家の清盛なと太政大臣小
いかてか示さる事をこゝろさしの勝れ物勢
あまたのはなにいさゝかなまの許に入りそしは
障ふるかたの陸奥や嫡の思ひはきれ傷となるちくら

あれとも机のまへに首かしらをたれて物思ひ人の
の御縁なきをあやしみ厨子に入りけれはの
まきもののぬしかく身に御うらみかりにけ給ふ由
夜を紀くつる此時扇一挺を半井保にたまはりて
て曜覚すかすめ花てしまし給ふうちおの御心数ならく
こめしの庭の名をわすれやらいく紙のかゝさしかりす
橘のえにしあをはめ思ふの風とりかけのあかれ
くらくひく桜の花の紀かれしきたるへ所しそのれと

志らみて世中をすてゝ思ひ在山ぬ庵におもひをよせる風雅の
ちりも塵らくなる趣は見え其心乃ミやびかなるいとく
志たひたゝ汁街の人は世に富貴の新川大厦高堂
にすまひ何飛閣の内にあるなれど善も悪しきもあり
茅屋のさまにて月に心を寄て紛らし此曙覧に
おとりて更に言語を絶しおのが数にくらべて
くらぶべき歌あらむ此世には勝れたり曙覧の歌
みとちかふ其心のきよき也此をもて志らに世にも光をおもふ

のかれ消たる心浮世のほかの月花を友とせし
を述しるし置しるしまておくになん参議正四位上
大蔵大輔源朝臣慶永元治二年乃文月
末此も由井の館に帰りてしるす

此は正二位の君福井におはしましけるほど
この場にかよはせ給ひて道の行てふ経ハやて
我父曙覧この書みるに立よらせ玉ひて作らせ
給へる我御手にとらせ給ふ家形学けり我父
世にありし時ひさ厚きたまものをうけしこと

みもはらハあるわか屋のことどもかく後へつたへんは
奥まてお清か事かれくかくも記したまひしかハ
父の身にとりてはいともうれしけなくいかも
おもておこしなる世あり常に面白くハ清摩拝は
録らせつる父か歌集の巻首に掲けて世にひろ
めまほしく思ひてありし旨を清もと人して聞え
給けつるに千代にあきたらきをたまはさハきしむまて
みなもうくにもとのこさまひつきハやうて清筆の
ましなくかうくなむ

明治十一年六月　橘　今滋謹誌

春されは。鶯の声ちかつき皇后宮大夫見たり。
おのつから。かしこまりてならひたるこちなる。
桜。あるは桃。咲きつゝ山桜はゆきかふ袖。
むかしは花の香をたつね。わかれつゝつい
はかなく消えて。千とせのけふ清筆ならす
積もりつ。枝の花ちらす。咲きしたまひ醸し

なきりては。ふるき(?)式して。桜かにかゆをあえて
花。桃かして穠をさせてき。つくし山にかしくかも
皆(?)清え(?)けまと。やうは。吾好つては。味むかる乃へ
られむ。者いるへとある者つぬなるへ好き
まては。清らうなる物と以ふ類くしいうめる乃
なるをや。訳よせるしけまはおなし。おなし

哥える源のふる姿学む精。いつらる者萬葉。あるは其
古今。きくて去る千載。新古今。以つきてまれ。詞よは
ふみ葉のかまうま。以後ゝのつく風つよく比
定まりつくりなしにてはなし風へ式えて。花萬
葉ゆえて。つくまるる。古新古。古今ええて。つくまる。千載
新古今の事後まるとやうは。心のうちは。姿好ま

知てつきせん。ゆゑなるをつねなましいは歌
ば実まことあらはし給ふ。清新とはいふ事ならむといは
ゆゑの和る事也。古く様をもとをつかひてぞ雅なる
なれば、みちのみちびきてきやうでも心のおもむき物から。
意のまゝ残学びてうつしくなからる歌までてき
ばあらそこそめでたしのおのゝ物なれ。さればおのが

我とある王さまた勅ありて。萬葉古今いまを。千載
新古今まで撰て。王さま歌の道は傳はると謂る
ゆゑ。後の一度との萬葉古今千載新古今まで
おほく一つしれたるもの。萬葉古今。千載新古今を観
さんやら。ほとしの京ちはら福井の町に。橘曙覧
といふ翁ありて。其の世に時より歌学を。ことさらのぞる

わ。はやわたしとて絶にけり。梓弓のいつもお

ほ猿丸集を家々に写し。まへつきみたちも

子今消息し。人ことかなしむ。法なりかく枝に鍍め

ら猿丸かりし。おほしたる人を。芳樹のなにし書をそへつく。

堂佐藤殿のしてこころむかにかへる事の際集

を拜まつり。はふにいひつ。多くの桃なる知ることもあら

あ。紀の飛鳥井雅章のつかはし給ふ事。

此ともし。あらたつもの。此なるうつもおかむし

ありし隙ならなる。ふかきを問む。関には。世の成

見やまと魂たちろきて。

おほやけを学び。古へをしるく。志厚く。さいつとし

ても。此ふのこころつり事いふ。学びむとぞしころなる。

ちつま病ひを好むて。今其の形を見えくろし
かと諫めし、都よりれつ、つまをむ遊ぶを引く
面影手つまういの弟子待。はつ見来ともし当つまき
き。今日こそ身に北いつまとも巨堂けれど
よ詠みし、新しとそ持ち。能つ心を紐とし之ちよ
出かまし云比景とも高くは、淵を翻のかを

つまえ縁をはなれて身のいかさま乃飛つくさとかは
よれくを。全ての折りむまと。ちを味ふし遊し
舞なるつくこれあんおのおか国て以あるはさへ
まね身な姿をおりへ見えりはちまなまるろ
云ふう。光はちし理まちしぬ。をろろかくふころ
えやうからつまゝつ来て。かよ詠みし人のいふある

し学びてそれか跡をおなじくすへきにはあらずかしといふ也けり。

明治十とせあまりふたとせの六月つゐたち。

東京四谷の寓孫子庵にて

近藤芳樹識

例言

一 此集は吾父年ころ設事にふれ時にあたりて詠せし歌をその自ら撰抜自ら書残し置れしをいはくてもまか一字の儘鏤らせはべるなり

一 四季の順序もて部類せるはもあり次類題乃躰にはよらずして前後わかるためなる見る人免れとそもまゝ詠み出られし次々に書置き

しハ原書のまゝ残存せれハなり

一巻頭れ歌乃詞とそ残搔摘てやうて巻毎の名此も表紙に記されける纂書の題辞をまゝ手澤のまゝなり

一補遺ハ易簀乃曰枕上に散おひし草稿なとを取あつめ今滋か手に寫し置しをれにゐはれなきこえり一巻となるをはこの季の歌數少しおあらけれは末巻の附録とハ物しつる成季

一父か遺意残されつるに傳へ世とのまゝ改志うひなれもいさゝか乃事をはくろひなき次物しはふか中にを補遺の歌と共に以まゝ淨寫をも成したまへは猶考へ訂さるにほしかりはかるむと覺ゆる書さへ成るもあまりしかとこをはかるにひかさのあるをしてゐかぬすちにそてゐかめん事のかしこきふたて寫し誤りしもはとめて書せ是添花之成季

明治十一年六月　橘令滋謹誌

早稲田大學圖書

松籟艸　第一集

阿須波山にすみけるころ

あるじはと人もし問はゞ軒の松あらしといひて答へてよ

穐のころ人しけく來ニけるにこひて

顔をゝへともち二染て山ふところにまへさに來る人のうるさゝ

朝きよめのついでに

このわらせて拾ふもうれし世の中に塵はまじらぬ庭の松葉

飛騨国にて白雲居の會に初雁

妹と寐るとこよ離れて此あさけ鳴て來けむ初かりか声

同国なる千種園にて甲斐国乃りくら山に

雪のふりけるを見て

旅なれし人もさへ乗る駒乃鞍の高嶺ニこそ雪つもれり

某氏乃かれてみちはるをとこのむへき生業

もなく貧しう物しけるは人もやしなハれ何ごと

を自からしらて辛きめみるを見つゝよみける此なろ

ひとりもちてきつゝ汲む井の水活をぬきはさ

みにて遠きつまうちてわれ妻乃くさはてひい苦しとも

せて物さらはあハれこニ見なして

汐なれて朝なゆふな汲む水も辛き世なりと濡るゝ袖かれ

師翁のよそ流しく來てまゝ旅居せらるゝあひだニ敦

賀てあるさまに物すとて行なひ流らはぬに

久しうとゆりおりしに秋ハまちとほに思ひてかく

なむ

角鹿のうらきよ〻玉藻をめでしこ歸るみ山ハ忘きまじけむ

遅日

みとられる牽見車乃あゆミも見れたく〻て殘る夕日かけかな

關花

あくらにとふる人のこゝろも似ぬはせき屋れさたくふり〻經

苅萱

敏鎌とりかりしかるや萱をへ申聞りや庵乃あれの夜乃雨

閑居雪

中〻にふり捨らきれうもれきは柴乃網戸をあけうきれ雪

舟中雪

枯乃こる渚乃蘆ゆゑ枝ふ散らしあまり柴ふみ乃跡

平泉寺の僧都と萬松山にゆくとて足羽川を舟にて
くだりけり川つきに見およほさる物もおほかりし
て人々歌よみけるに狐橋武

川岸乃崩にてかゝるきりもり葦の茂ミに見えぬくさすなる

閑居月

あけくらふる屋所ハやとふ身すとこる日は我みもさもかくらかね
捨られて身ハ木のくれ二きえし月の影さへうとき椎かしとこの形

竹内年名か藜をとてつくれる杖くれける時

僊人の手ふりにならへ作り出て心つきよれ川寄れあるかな

述懐

なかなくは思へハやさし身なりけり世をひろそはぬこゝろのおち栗

筆ちかりに玉邨江雪のとこまて

あらたまらぬ筆取もとは二こゝに来て年に稀なる人をいとまし

都乃かりて

大行天皇乃御はふりの御ことさへてはけるすさの
日泉涌寺に詣けるときみふ乃御ことさのち
ほりなへて佛さ侶二物しまへ乃御ありけ侶二
もれたまうなら見奉しきこゆるを畏けれとかれたく思ひに

ま数りつ

ゆくしくもかとけの衢をひき入る大御車乃みうしや去の中
甲きゆめ健め今ほし四歳になりにけるハやかく物

かくりふとしてくるかしれとれ二思へりし此二月十二日
より疱瘡をわづらひていとあつしくなりもてゆき
二十一日の暁にみまかりける歎きにしづみて
きのふまで吾衣手にとりすがり父よ父よといひてし児はも
健めこゝりて後いくほともあらぬほとに山本氏
の府中にものして帰るさきれは待む人よゐ
たへりしをされいかことをせち二思ひいて
声しつてぬすとりかなしくゑくるもかなりくゝる親鴉これ

人のかく詠けるとれ
抜かれ身成さてくなる稚霜ちらすりもとをもうらもうけ程
埜邊に藁屋つくりかけしめてうつりはなる妻の
あるる所のさゆひなりといとわろうしけを聞くに雨
いふしうふん所に盗人なと乃くへれ夜のけきな
りぬとゆふやくをきくなる
父乃十七年忌に
昔雨乃ことはにまくせてそむ庵ハ壁かしろくおろきけしふし

今も昔りいまさかりしむらはひつもあしてるもみをあハれ親なし
髪しろくなりても親のある人もおほかるこのよに我ハ親なし

墓にまうて

墓にあゆるさくら額にあけりてうちなかめて地上にこそ

竹間霞

郎竹ハことおもしふかり砕けし風乃あしきはうちかすみとも

綸人釣春水

吉能川春のふれきに絲されて琴に鰭ふ流魚をいつられ

春風にちるも斂めて玉しけや此川上にひとりあゆ流

山家樋

山さとのうけひ流竹路ゆく水もよるとはられてはなれきさら涅
一すち流ふり根をうく流竹ふして何をうハおとひかくへき
山かと乃うけひの水乃やりすてゝ心とゝめるなやなけき
人そかこうしるそ流に久しうるさくりけれそ
とうけしてとりまやりけるにもさせやりし流
やゆふきれとのひとりに無き宿ハかさも二哉ハもさぬふりけり

野にいきに家なしびとはありく蛇なと出ける

を妻乃見るしひこうちおとろきてかくて物すな

児ともられともひなほ我ふくさめて

たゞろしき歯乃人言よくるふきハ透迫いへる虫の口はもれたるハ

母の三十七年忌に（おのれ二歳といふとし二はゝ[illegible]なりけり）

けふ見るは子の孫ならの身のうへは面をも母我知らぬふりけ泥

紙をとりて朱薪やられ物をもしめ日ことにとり

まかれはん物にあいられる何ぞ我の事へのいきるし

おけと人のそめけるより此おきてはなめぐらけり

ともし法物のえにうは書乃かけりに

うるさくは思ふものからかきつめてあつましになりかすの薪し

あくる一月二月ハかりはこゝをやすしまりしすてゆきけ

るかあまりとやはしさまおこたりきまたふりまさら

さて思ふにこれ乃いちはいるもとて我乃ふほさん

まかるこそはえしくましれかりけるもしや今ハ

よくもあしくもおのが心のむきにまかせてとりし法物

をしへくにおちやりつ

夕煙今日はけふのことゝおけ明日の薪はあれ採りておかむ

足羽川のほとりの桃の花さかりを見やりて

紅藍の水を纈りてあれは川神代もきかぬ桃さきにけり

早苗

うゐふしに多くの植女立ならひ笠もたもとも泥にひたし入る

壬子元日

物ごとに清めはらへて神習國風しるき春は来にけり

帰雁

春のけふ門田面に群れし雁一つも見えぬは何日さりけむ

菅原神の九百五十年の御祭に梅花盛と

いふ題をよみて奉りければ

うめの花白ひ起さぬことも無し東風ふきそそる春の神垣

加賀国山中の温泉にて

あやめの袖ふきかへす夕風に湯の香つたふる山中の里

穐田家

蚱蜢　うゑまき出てとふ妹乃ひなりよろこひ人豆を打ゆ

新竹

稀に来るさゝは小鳥のちの聲もひゝの音ぬへく見ゆる若竹

戸川正淳か男兒うまませけるに

ますらをと成らん兵ちこの生さ記ハ握りけしる手にもるかり

竹

郎雀を鳴ハ三さもよかれけ而らめきこちさちとふあり

初穐月

蟋蟀乃声もまりりな此夜ころ妹つきかけぬ淺茅生乃月

苔徑月

露しけき苺ちにひとり月をおきてたゝるも孔か夜ハの柴戸

愛山

人よころ高くふりゆくけなくハ山より外に見る物もなし

樹間鹿

あそ鷲ふり角あ流鹿もくゝちゑ乃柞のうけ哉奈うけに鳴

公にみよすゐるつゑの心おきてとおろへき歌よみて

く詠ると人ハおもふとて

世乃中の憂きをば我身を先なして君と民とにすめ心あれ

越智通世か妻のみまかりけるとふらひに

亡き母を恋ひつゝなきて寐たる兒乃顔見るからに憂れとはなし

木屋四郎兵衛か父のもとにまかりけるに

言あけもいさめしものも声なきに聞まほしくやせめてこふらむ

笠原元直か游學のため江戸に物すなるに

すゝめやる手れひ乃衛の門出も今日と聞くは猶ぞ泣かれける

佐々木久波紫かさとにこゑるひにまかりてよめる

ともなきめしはあくるに

今日そのわたりておくりよしをあふぐ立てむいさよの末を思ひて

庭なる山吹乃秋花されけるを見て

黄金色とほしき屋所とりふ人を見せばや妹乃山ふきの花

與女見雪

妹とこそ寐るはふなくて鴛鴦の浮き寐の池の雪を見る哉

笠原元直のみまかりけるを悲みて

今日のちのなけきはちせむと同し岳に魂さへあひて生れきにけむ

湖上月

片田舟こく楽りすなといさめても月に心乃よる浪路かな

書中乾胡蝶

かくにふる蝶には大和魂を招きよせへきよすかもなかりし

山家

白雲乃行ひまれに見おくりて今日もくらしけり蓬生乃門

落葉渓

今朝見れは簀子にきはなりにけり夜一夜ちりし庭のもみち葉

古書とも読ミ耽りをりて

直ハ男鹿乃肩焼く占かた鍵とひて吏あかるめし神代をそ思ふ

嶌崎土夫か子の袴着に

顔にちへにはひによろせよ志とけなく着ふれ袴乃皺をこれの翁

中根君の江戸へまかりけるをおほしらぬ返りこんに

雪ときゆるとあめしに行嶌の殿身も消いりてわかれかならむ

人に志めしける

口ゝに手向ふ神は先拝む朝乃きそろを一日こほるゝ

丝昼雪

薄しろくなりてさふれる雪の上も汚さて一日見る庵の軒

跡とはふも亦ハあらせぬ雪乃うへに心をつけて獨見るか那

辻春生か母のもとにこもりをるに

乳ふさには兒のむりには身をふして泣きすかむ母よしくと

母なりは我乃しふりと巣くらする鶯見てもうらやまぬるむ

河崎致高君の江戸へ行に

旅さらも岐蘇ハ五百重乃山つきやとりたくるれ朝出いそくな

南部廣矛か吾婿へゆくに

とうなにハ涙そ出る丈夫も人干古を知るさろもこゐ

虎画

聞すらぬ獣乃ちまも歛くちるを埜のをもけしきを派らしか原

牧笛帰野

思ふこと無けふ派もれハはひ乗て牛の背ニ吹く総角の笛

帰路は牛ニ馬ちせて我はそく笛吹きふらぬ里れあら手犯

古溪螢

ゝ谷川水音くらき岩かけニ晝もひかりや飛かへるかな

五月

楳子乃うるゝ晝さへ寐ましく思ふさ月ニそや成ニけり

雨いろく降いてきて人皆とひニこひくらけるころ

めりしうをとそめへる空を見やりて

天地もひろさくそろそろて先あふるゝ青雲のそらを

馬

髻をとらへかり裸うまを吾孀男子のあらなをなする

咏十二旹内六首

辰

やゝく派野への朝日をうろふれてそろ飛しういふこまろ哉

己

うつろひて南ニうつる日の影うふ個のとれする苍の上乃露

午

目ニあまる菜の葉乃露のひろさひし機おる音も里ニと絕て

申

あさりなり九鶏も塒にかへりきぬ夕食の妻木をりこゝのへらむ

酉

夕皃乃花しらしらと咲めぐる賎か伏屋に馬洗ひなり

戌

長しとは誰かいふとあらむ秌夜もくるとはそやくはやの鐘音

繪に竹取の翁のくや姫に物いひをるところ

あやしくもよはひろ数をてわかぬめり竹中にはありしもの山家

薄

女郎花萩より上に立乃ふる薄けとかくうち見るさけ流

静處落葉

ちりくるはそことふ木葉みゆはしめり風も音無き庭となりけり

遠山見雪

とれぞしら紀朝床いてゝ少女子か黒髪山乃雪を見るかな

雪朝

宵に逢る人にはあらめと朝寐顔むかふくるしき雪の色かな

烟草買ふ銭無かりし時

けふり艸たきさに煙立ゝてなくさめしかは窓乃つましく

蝨

着れ物乃縫めくに子をひりてちゝれ神世始りにおほ

綿いりの縫目に頭はさしい移てちむ蝨よこのたとふとち

やそらし出てさわるもれくひを匍匐ありけ我に恥見する蝨とも　この歌

屋上霰

音きゝは安ふいるやとそらめかし身を打たく　あられなりしかと

竹内甚八郎か江戸へ行に

おもに聞くとられ木山乃雪なくとも軽く思ひてあふふなゆきもよ

佐々木久波紫かはしめて江戸へ旅たりは

う移しされ不二のなりもも日本れ富の山をうかひに見そさひ

神まつり

潔やさかれ乃青葉すゝのむしろ木綿してなひく神の廣前

里人乃羣りはふ神やしろうちひゞきは鞁いさゝはさし

海山れ物をつくしかやれつふし　御饗奉らむ千座五百座

牡丹

目なうけふはのりを二十日へなり國頃けの花乃色香も

水鶏

月も影さしはなりゆく古沼乃声なをはせて鳴くくひな哉

扇羅風生竹

思ハれもあふきならして見い詠なり一ゆすゝる風乃すゝしけ

春よみける歌の中に

すみくと生ハ卯麦子腹ありて燕飛く風皆乃山さと

夏夜

寝よといふ鐘ハはくも一すゝお乃小夜風にせてハなつかし

秋夜

ならさせ夜ふけて虫乃呼よ図に火あらくなりあるは誰が妻

冬よみける哥の中に

今朝も來て枯木の小枝くゝるなる雪にぬさら綫うしふへる鳥

ある時よめる

旦暮にいく鐘の音を八枚手のひきに加へて聞よしもこの形

松戸にて口よりいつるまゝに

ふくろふ乃糊すりおけと呼ふ声に衣ときはふち妹ハ夜ふかく

おのか絲纏につくりて見よなと二郎太郎三郎川に日くらす

我とこの心ひとつは語りあひて柴さしふすくらし松の戸

人ことに乃山の諂ひいふさる我もひとりのかたハなかり

赤穂義人録を見ける時

又無きはさひしかりけり然りとて心ちあらぬ友もほしなし

影さむきよるの月にきらめきし剣おといふにすると知りけむ

贈正三位正成公

湊川御墓の文字ハ知らぬ子も膝折ふせて嗚呼とよめり

燈明寺邨なる新田義貞公の石碑見にまかりて

碑面に新田義貞戦死此所と志るされてあり此石のあるところを世にふさはしと人よひて地名のことくいひならハせり

にひ田塚こゝのひまけてふせぬてふ文字ちこはきを八野風身にしむ

菅原の神

御涙乃外にふりけむ誰ひとり都へいさといそぬあけくれ

鐘の声瓦乃色と御涙もほくしぬ空乃うちなみへ

三線

寝れひきて鳴くらくひすらとはなりて弾きかすあくは物の音みちらさ

月

人ハ皆見さして寐らは小夜中ぬ月を静ニ入るゝ図ニのあ

塩

塩を無くなしてこそしといひ乃は二銭あくて買えさう
なり今日より山をいきほ程ハさいぬか出くめり乃は
うりて塩こふ庭しきはしくまちるまへと妻乃いふ程
きくて戯むすゑ

汐のせまちやくつけりてさぬかとはつゝ程ニあれていよまてありける

酒人

おしたくと無りくは酒乃なりひさきら程しき音をはける物かあ
煖むる酒乃ゆるひニあさはれて今日も家路程黄昏ましに

本覺寺の庭の牡丹花見ニ物しけるニ太年あく

わしさし實主ぬれとを思ひいらむ
花ニ來て学わり蝶の羽はうひれあるし尋ぬと思ハ程まく

緇素見月

樫川ゝ鷹すゑ衛をうへゆけと見ゆ八一もと乃野路の日影

遠鹿

迷ひありく鹿の遠音ニ耳ならて我もめあかぬ夜を重ぬらく

春雨

月のかさちかしもなかしとあれとり香の雨えぬ袖川あさ庭

雪朝

雪ふりて手拾ふ落葉乃ましらに朝けの煙たえたれく侘く

待子規

まちもまつ丹乃いさよふうへねに夜ふかくれなもなお竹くは花ゆゑ

雪

うはら垣刺も枝も枝もやすられなひけて雪ふりかかりけり

年内立春

む月物をこよひは一日もある哉春ハこころよしの市といふ

鶯告春

春さりと旅けの小櫛もとしせればほのくれちる鶯のきて

松前鐵之助

蛛の巣ニ顔さしあてゝ三季まて簀子の下ニ匍匐てかくし

高山彦九郎正之

大御門てみちくきて橋上ニ頂根突きけむ眞心ふと

御輿屋八兵衛

誠有とは地下まて鳴く虫乃声も雲井ニひゝくなりけ路

濱田彌兵衛

大灣の首長とらへて目の前ニ日本人乃所業見せき於

伊勢大宮ニ千日詣とけふ事志ける笠因直方

呂 松坂人にて雨龍天王社の神職なり

ちとせふる心乃中を宮川や千とけふ日数渉りをはりけり

大石良雄

睡りけりとあそめしもましも一くちの名しるとなりぬまほらし我乃とめ

山階乃里乃柴戸しめても我仇人のひまやさく路し

間十次郎光興

血つきしる槍ひきさけ手落くさ乃柴のうちとう我てさくりし

大石主税

うつし繪とかはりて父のありさまを等恨むらくも泣し子ちゝろ

近松勘六行重母

劔太刀焼刃に我と身をふして励ましやりぬ仇うつ子等

祇園百合女

一つある葉かけの苔に抱き身を埜に朽さす姫ゆりの花

芭蕉翁

唇のさむきそれこそは妹のこゑ聞けば骨まで徹る一こゑ

嵐雪

内日さす都のてふり東山寝たる容儀にいひおほせけり

塙検校

何事も見ぬいにしへの人なれど涙たゆまぬ不盡の言乃葉

僧桃水

宿かりし佛もおどろかれぬらむ鞋つくれる濾師乃家

石川丈山翁

比叡山ふもとを里に門とぢて剣を筆にとりて換へる

朱舜水

ちくさ咲く皇國をうれしく思ひけむさり矢遁れて來める唐鳥

武者小路實隆卿

をちにふと烟乃末を思ひしも君の御ゆきに馳むとはせて

僧涌蓮

疾く起ていとめぬ身にも志むなし囱よりほしき在明の月

甲斐國徳本

人いのちの心乃淵をあすの川淺せよとへ事哉ましらめ

岡野左内

すなり屈し垣の山歛飛となきうしろに見すにゆく蛙のなれ

賣茶翁

木芽煮て此ころ都ぶりなくれきれを見けり嵯峨乃芒の稱

岸玄知

吾物とおもひし物乃ことは價もて錢はとらせん野路の棋樹

千利休

來し君の朝良ならぬ乃ありけむ一つ殘し花にかへ事

桃山隠者

吾ともは徑もふさぬ桃山乃香日影とうてひそり文見い

玉瀾女

此筆ハ眉根いくろふ筆ならん山水かきて背ニ見せる筆

契沖阿闍梨

こしはやく難波の浦乃八重霞やへくあらぬ志るしは立らぬ

筑前國孝子莊助

かきと志ほ足とそ蹈志めてはひよらむこのぬ両親の言

僧元政

不二乃根は背ニ負來らぬ吾母の御蔭乃下ニ見てや過けむ

池無名

勢田の橋かれ人となく老りて後はあし扇かも見なしぬ哉

小澤蘆庵

うらやまし嵯峨山ちかく家ゐして花乃便を得らる身の上

飛騨国冨田禮彦おほやけのおほせにて去年
より此国の堀名といふ山里ニ物しける春ハか
とかひもりけりすくハ近きころ白うゆき出いそ

禮彦はしめて其つかさにまけらえておほよそくい
やしけるより日あらたかり出られつゝおほく
かなりて今のさかえてうんかるさはきしくふえゆきぬ
いんさ流やかりかと物てしる飛きえて

歳々にちくのゆく御世の昝をさきて咲あふるゝ白かねの花
香さへ越乃山邊に白銀の花守と於く庵むすふ君
夜晝と手人いさわひ御いき物掘うかしする白かねの山
人あふさあり申此てさ物し於るとよる見ぬく

りありきて
日和ひろりいふさぬ山乃洞のうちに火ともし入てうかね掘出次
赤裸乃男子むきめて鑛乃まろかり碎く鎚うち揮て
さひゆるや碓とてきらくとひう流塊ゆきて粉すな
筧かけよる谷水にうち浸しゆきは白露手にさはをとくる
黒けふり羣りくせ手もすゐ二吹鑠くせハふしれ落るかね
鑠くせハ灰とこう撰てきけやうにのこまり殘る白銀の玉
銀乃玉をあふさそ莒に収を荷緒つくめて馬馳うまる

しかうるの荷負る馬を牽きて御貢はこふる御世のことなれ
禮彦がなるところみはしを見れハ短冊式紙やう
の物あまた押しかり聞くに此さうし市よりかへりて後
ほとに途にて薪おはせたる牛のあへるがはらに痛
くあてて角ふりかけるがおそはしに疵つけたると
てえふちつたへける人もいさゝかおまりいではせん
ところを禮彦露ばかりも憤るけしきなくその
ままにしておきけりいまそる疵ともの上に紙を

たたきくれちひさきも切てほとよく押なして自らひと
りてはかゝる画をも歌をもなからしら書すさひたりける
なりとふんけは物のつきさとありてはよからぬのちと
あるかぎりハ人のあやまちしけんをもあれなに
責ることなく見直聞直しせんとぞ神習おほやけ
心にはあらめと此ことをおいしくなめられ
物めくまで心獣に及びける角いきるてし罪をとがめん
禮彦春になりて故郷より孫生まれたりと告

きこえける男兒にはへありけりとよろこふこと限
りなしとてこのいはひ歌よみてをとなふるに
万代の色を見せける高山乃松のひこはえ初しよりは
尸絶知らぬ兒乃拳もかしこんとふとる蕨もうち見えし世
蕎麥いらしてもてれしなをあまた食ひて戯を
口
蕎麥乃實の角ばりしおあしふり圓く居よりて腹いてこう敀
あつりくりけるにそるくれくりきて今ハてをとひく

すなはち禮彦をこちの任をはへ日を經にける乃
国に歸るへきなりときけは
衣手乃飛驒八百重乃山のあなたに君も又おなし我も行えし
君もおなし我も行えしと思へともまたゆくりなく逢事も有む
高山にさかえて立てる松かえはちよへていはせ千年とことほく世も
三嵜高子さいはひ其ことほきけるよと
ありけるにうるはしき扇とり出しくされとなける
をなと新うなるをいひてうたかひしなあはれ

そのぬりかへるらむとも思ひしられなに心なくて
ありし名をかはらはかれるなりゆく此扇けさもる
れしらす長きよのことゝもなりぬと思へハ見る
千心うちしぬとて
君にまたあふきと思ひしを今ハたゝ涙ながるゝ物となりけり

穐訪田家
餘所人は見なれぬ里れ一くさと稲おほやめて我をゆひけれ

穐衣
狩ころも縫し苍すり脊に着せゆ小鷹すゑしるふりくやく見む

暮姝鹿
小牡鹿乃蹄にこのくさ今朝の霜あハ猨鳴音も消むとすらむ

山家老松
眉白き翁出来て千とせ經る門乃山まつ撫てほむるかな

閑居風
あけかたのあらしはそのしくして夜ゝゝ寐させぬ柴戸乃うち

田家煙

山かひの鹿猪田守るとはふれ郎家のまへに立つ畑のかれ

漁郎

家々のまどの火あかし網むすぶ手さきに夜をやふかすらむ

行路雨

雨ふれば泥路たゆむ大津道我も馬ありめぐる旅びと

古寺雨

風まじり雨ふれる寺乃犬ふせぎしぶきのぬれごろもみあし

笠原白翁が十日ばかり都へ乃ぼりて

木芽山雪ふかむ日も遠からし都らしきて帰りおくれな

寺田清遠の父なる四とせそのかみより物もいひ
えず足もなえてありけるを清遠夫婦露怠ることなく
夜昼いたはりまつりしは齢七十あまりにて今
年みまかりけるとなむいひ 二

ねぶるまで床邊はなれてありし身のまくらべふみてのひまやなかるらむ

温かに着せまゐらむと妹と背とかつぎし衾もいまはかなしも

忘れてはいくらもみの膝ごとに獨泣くらむ

詠四旹琴

朝出ゆ夕に還るかたを見て芳埜乃山路かゝれる雲

言ひよ絶といふともうとも言てぬ色に水をながさむ堰出の玉河

松と皆かはらぬ色になりにけり昔ひかし川八代総乃多ちに

都への名より絶へき冬がれて雪にふりゆく垣ねおもしろ

照ときさへ啼て来ぬへき夜のさ婦しさ軒に知らせてうち薫りぬく

しば戸もくさみる絶まちて白ゆふ人通ひする宿もなかあはれ

露をおとし風をまねかむすゝきもられたる荻ふりし宮城埜の原

今朝もはやいきされくせ懈怠を見たくなかりし垣根から知る

さゝぬさに人の物いひ嵯峨の野に紐とき出てふるさとあくめく

ゆひかへし竹もゆらぎて初霜乃おきうけにける一ととの妹

色白ひ品をあらそふ春檻に我あれのかぬ苍の仙人

風さゆる冬のはやしに白雪かとばかり見えて白きものあり

寒僕

なりひさぎ市より取てくる酒もおのか夜さむは温めぬなり

降さま流雲の中に足いまてふるあらくも人乃志りゆく

寒婢

雞の音によびおこされて硯石もとる手こゞへし暁の霜

寒燈

しもよをハ沈む鐙火かきたてて苧をうむ窓に霰ふるに聞

寒猫

埋火に夜すがらせなる老ゐては霙にぬるゝ妻まひかせて

寒枕

冷ゆる夜をいとハてうちしきさしのへられし妹が手ならし

雪朝行人

ふりとはなき人も見れ雪しけき朝日におはる杉のした道

煙

あはれよせ銚子かけてたく藁のもゆとはなしに畑のけふり

川千鳥

夕浪のよりつかへり磯松のあすまさゆる夜ちどりのな

よ嵐ハよりそくをハかへり夕波のさき紀二ゆきし川千鳥かな

筑紫人日高万二満か其国へかへるに

程すきて帰らぬ君と夕占とひまつらむ妹こそ行て逢へ

雪江晩釣

嶋山乃色そけきて釣夫の着る笠白しさゞらなみの雪

馬上眺望

鞍橋乃手をうちかけて駒の足明石なるらむハ須磨にむけさせ

松田眞信志それのはこすりの日子うませ給ふに

一日さきに年のうちに鶯乃いそねさうけむそれ音いさまし

安居郡弘祥寺に春ハ人々ともに行て

さゝけらふ佛乃御名もおのれうち見るさのほとりうくひすの声

人のあまた山亭に日ころやとりけるをとふらひに酒まき

あふハまろふとあまたありや酒のみ踊りけらし

けるにひきうけりて今日ハいとはうくしき舞ひと

りそこ来来るいとあやみなることの舞ふとひ

てりそくるやけしきふり花乃心ははるをりこ来

あはなりし我なりくに身のさいえひそとひとつよる

すひかひうちに

水鳥乃立さはくなるさてハ程なく清き山川ニ來つる

中根君乃御仕たとえけしうこそせらさしいさ
いかなるそうしあとやなる衛ニ入なひけるハ
かくてなたはしく身もやしふかれなりんとよるよ
つれなるたはさなるをまさ小そうとめさ程て
あまりて遠きとなるくまほく物しまうしけりけ
るころ程ニ
我らもことニ入て歌らるゝ游むとれとひし君乃こゝ江戸へゆく

社頭松

斧いきぬ神乃御山のまつ乃木ハ千代ニさかゆく枝葉しけりて

荒蘇祓

明日よりは夏の暑さもあらしなあさたるれり瀬々の川のせ

故水戸中納言君乃御一周忌ニ寄月懐舊といふ
たとはよませたまふそらあるも奉るに
よはなれも隠る月の筑波山たとけき岳乃中空にしも

飛驒国冨田禮彦の五十賀

君と我いくちよハかくて經にけり百とせとはいはむもろとも二

初雪

うれしくもふりぬる雪ぞ木の葉乃跡つけけるやけさハとけ河

昔月

打なひく柳のけふりはれても猶うちかすむ夜乃月影き

嶌田良郷にまかりて後とふらひに物しける

讀はし給ふ書ちりほへる文机乃あたりさひしき窓のうちかな

ふるはと人小趙屋善六か八十八賀

知る人乃無くなるか多き故さとにひとりは翁千代もへくなむ

幽居花

屋所のさひしけハ苔路をうち掃てこそまつらめ暮れ稀人

遅日

うくひすも鳴わ経る声ゆるせり淀川てこなかくし日は

石

地にいり落けむ星乃雲の根となりかくまれる千引なるらむ

佐藤誠ヵ春ハかり江戸へ行に

まくひをもゆるよりこに声ひきて門たくりける君が朝くち

ゆくさきを見と見む老の歌袋肩にゆきまておとりゆくらむ

武蔵野のはるれく待らせらひさんふ老ませる父いそげふき児に

岡邉君の御許より人してあふらひめしくさといふ

こまなしくさハ来くる人さへは奇しにならえてこて

室門のとまりきといひなるをはしけぞける皆ハ五月ハならぶ

りけ理

水こえさすれ卯月の川えされ小舟とるもかくれぬ雨ふりてゆかむ

勝澤青牛翁の江門へ行ける二

おとゝきあのことは我も此朝け君が別とてなきける一声

古翁うれしく物しまふとあらしくひにおよ

ひけ風を思ひて

道そうき馬ひく子らも目をつけて来まさせりと君はいふらむ

多田氏に行て酒のみて酔しふまに寐たりけり

けるに目さめて見れハあれほどし雨そやみぬる

そほふるあくれいくあくり見まはし自ら茶ふち

そらふとしてをへり出きて

雨の音きく〳〵に寐ぬる手まくらの夢乃うちにや帰り来にけむ